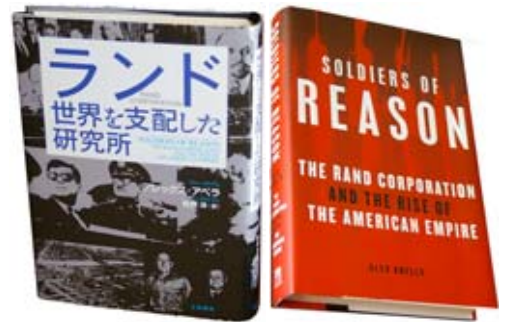


# SPACE JAPAN BOOK REVIEW

衛星通信研究者が見た

Reviewer: 編集顧問 飯田尚志



アレックス・アペラ[牧野洋訳]: "ランド 世界を支配した研究所", (株)文藝春秋, 2008.

Alex Abella: "Soldiers of Reason: The RAND Corporation and the Rise of the American Empire", Houghton Mifflin Harcourt, 2008.

ランド研究所とは安全保障に関する研究所として名前は知っていたが、マサチューセッツ工科大学（MIT）附属の研究所ではないかという程度に思っていた。しかし、これは私の思い違いであった。本書は、原文題名“Soldiers of Reason: The RAND Corporation and the Rise of the American Empire”の翻訳である。それでは以下に本書の内容を簡単に紹介しよう。

ランド（RAND）とはResearch And Developmentの略ということで特徴もないが、1946年設立された安全保障に関する一大研究拠点として非常に成果を上げたシンクタンクで、同研究所の関係者から29名のノーベル賞受賞者を輩出しているということである。ただ、ノーベル賞が目的ではなく、創立者の一人の空軍将軍ルメイ（C.LeMay）は第2次大戦中に東京大空襲に対しオペレーションズ・リサーチ（OR）を駆使して戦果を上げたといわれる人物で、本当は自らのイメージするところから神のように世界を作り替えることを狙った研究所とも言われる。現実としては、ランド研究所は、空軍の全面的な支援の下に優秀な頭脳を第2次大戦終結後に散らさないという目的を持ち、国家安全保障上の脅威に対する上で必要な解は外交よりむしろ科学にあるという思考方法に基づいた研究を行うことであった。また、空軍が財政的支援をするが契約上の報告義務免除という独立性をもった研究所である。

ランド研究所では、現在では我々に馴染みとなっている、システム分析、ゲーム理論、MiniMax定理、線形計画法、ゼロサムゲーム、フェイルセーフ、軍事革命RMA、囚人のジレンマ、パケットスイッチング等の先進的な理論考を多く輩出している。また、1946年から人工衛星打上げの可能性の調査に着手し、1960年通信衛星開発に関する政策問題の研究を行っている。

ランド研究所設立時における見習うべき内容として、次が挙げられる。

- 基礎研究に従来以上の多額の資金を投じること。
- 自身の研究を進める上で必要な自由を最大限与えるべきであること。
- いろいろな制約を最小限に止めれば、軍の発展に今まで想像できなかったような新しい貢献をすると考えられること。
- 独創的・創造的な思考を促す上で最も効果的な方法は研究者全員に同等の権限を与えて競争させること。

ランド研究所では、冷戦時代にソ連に本気で立ち向かうための研究がなされたということであるが、我々に興味のあるランド研究所が関係した具体的成果としては、偵察衛星開発のためのコロナ作戦がある。これは、米国の最初の偵察衛星プログラムで、1958年に衛星打上げが開始されたが、1960年に13回目の衛星打上げでようやく成功したものである。解像度1.8mといわれるものだが、冷戦での情報収集に使われた他、1967年のイスラエル・アラブ諸国間の「6日間戦争」や1968年のソ連のチェコスロバキア侵攻などの情報収集に非常に役立ったということで、当時のアイゼンハワー大統領が、「われわれは宇宙プログラムに350億ドルか400億ドル投じている。宇宙からの写真によって我々が得た知識以外に何も成果がなかったとしても、投じた費用の10倍の価値がある。」と言ったとのことである。

本書の執筆者はロサンゼルス・タイムズの寄稿記者ということであるが、本書にはランド研究所の職員であった数々の著名人のエピソードが収められている。その一例を示す。

- ジョン・フォン・ノイマン (John Von Neumann)は、ノイマン型コンピュータで有名であるが、ゲーム理論、MiniMax定理、ゼロサムゲーム等の開拓でも有名である。彼は、1度本を読むだけでその本をまるごと思い出せたほど驚異的な記憶力を誇った。また、彼の下で数学者ジョン・ナッシュ (John Nash) も活躍し、彼は映画"Beautiful Mind"(2001)のモデルとなったとのことである。
- アルバート・ウォルステッター (Albert Wohlstetter) は基地研究・フェイルセーフの提唱者で、ランド研究者の中では最も影響力のある人物で、彼は数理論理学の神童で17歳のときに論文をPhilosophy of Scienceに寄稿し、それを読んだアインシュタインが感銘を受け、お茶を飲みながら議論したいということで彼を自宅に呼んだということである。なお、ウォルステッターの妻も研究者で、「真珠湾-警告と決定」という本で絶賛され、その本によると、米側は真珠湾攻撃計画を示す警告兆候は不必要な情報雑音のために認識できなかったということである。
- ハーマン・カーン (Hermann Kahn) は水爆戦争論を主張した。後にハドソン研究所を創設し、人類の運命は太陽系外の宇宙空間への植民だという未来学を切り開いた。彼は、スタンリー・キューブリック監督の映画"博士の異常な愛情"(1964)のピーター・セラーズ演ずる博士のモデルだということです。ハドソン研究所とは「日高ワシントンレポート」<sup>(1)</sup>の日高義樹が首席研究員を務める研究所ではないかと思う。
- ケネス・アロー (Kenneth Arrow) は、マルクシズムに対抗して合理的選択理論を打ち立て、51歳でノーベル経済学賞を受賞した。彼のランド研究所での研究は今も機密扱いとのことである。我が国からは経済学者の青木昌彦などがスタンフォード大学で彼の教えを受けている<sup>(2)</sup>。
- アンドリュー・マーシャル (Andrew Marshall) は、今日のRMA理論の体系化を行っている。RMAは新しい軍事技術が出現するたびに起こり、世界史上少なくとも12回のRMAが起こり、そのうち6回は過去200年間、3回は1939年以降に起きたという。要は新技術を使いこなす者が勝利を得ているということである。

また、ランド研究所はレーガン政権の小さな政府、レーガノミクスに貢献したし、関係者で著名な人物は、国防長官マクナマラ (R.McNamara), 同ラムズフェルド (D.Rumsfeld), 国務長官ライス (C.Rice), 同キッシンジャー (H.Kissinger) などの他、本書には、ニュースで名前を知っている人が多数登場する。ランド研究所には上記のような才能を持て余すような天才が何人も登場するが、我が国では天才はどこに行ってしまったのか、受け皿があるのか心配になる。ただ、現在のランド研究所は、他の多くの組織と同様に集団的な思考を強制する傾向となっていて、従来の研究面での合理性と独自性を尊重してきた組織にとって自己矛盾的となっているとのことである。

以上では、ランド研究所の研究開発に焦点を当てたが、本書にはこの他、スタッフによる1971年のベトナム戦争の機密レポートの暴露も詳細に述べられている。また、翻訳版の巻末に世界を動かしたランドの人脈として30名程度の氏名、業績が添付されており参考になる。また、訳者あとがきとして、何故米国はシンクタンクの意見に耳を傾けるのかについて、米国では政界内の論理だけでは党派色が強くなり、国民全体の利益にかなわなくなるという考え方があると書かれている。なお、本書についての新聞の書評<sup>(3)</sup>も参考になる。

#### 参考文献

- (1) テレビ東京にて毎月中旬放送.
- (2) 青木昌彦: "私の履歴書 17 スタンフォードへ", 日本経済新聞(朝刊), 2007年10月18日.
- (3) 評・久保文明: "読書 ■ランド 世界を支配した研究所 アレックス・アベラ[著] アメリカの政策動かした科学的思考", 朝日新聞(朝刊), 2009年1月4日.